わがまち・ふるさと再発見！

＝身近な史跡めぐり＝

㊼ 香取神社（木）

案内役 田村哲三

前号で紹介した観音寺の隣に香取神社があります。祭神は経津主命、創建は不祥ですが、寛永3年（1626）に検地され木村が成立した頃に創建されたと思われます。村人が初めに心のよりどころとしたのが同神社です。

神社は宮司の有無にかかわらず、お札を納める社や石神物を祀ることで信仰の対象となりましたから、僧侶の在籍する寺院より先に創建されたと考えられます。また、同じ江戸川の中州に建てられた観音寺に比べ、高い位置にあることでも、同神社が先であったと考えられます。社は平成30年3月、付近の都市計画事業に伴い整備され、隣には公園もできました。

境内には多くの神々を祀ったお堂や石造物が建っています。特に多いのが庚申塔ですが、その中に寛文7年（1667）造立の聖観音立像があります。観音寺の庚申塔から16年後ですから、1代後ということでしょうか。観音寺の銘や逆修と刻まれていることから、寺院主導の逆修供養が行われていたことがわかります。

祀られている神社は、天満宮、三峯神社、稲荷神社などで、三社稲荷、水神宮、待度神（待道神）、大杁（杉）大明神、第六天などの石神物があります。このように多くの神が祀られていることは村人の信仰の深さを物語っています。

天満宮内には「菅原道實（真）公霊　木村小学校生徒中　明治十三年一月吉日　世話人3名教員1名」の名が刻まれた石塔が祀られています。生徒と父兄、教員が、生徒の学業成就を願って建立したものでしょう。

参道左手に明治十年七月一日と刻まれた、西南戦争で戦死した須郷寅吉招魂社の碑があります。須郷寅吉は、明治6年、第1回の徴兵に応じ、東京鎮台歩兵第2連隊に入隊。4年後の明治10年に勃発した西南戦争で、都城方面の征討軍として活躍しましたが、7月1日、肥後国壺屋（現宮崎県）の戦いで戦死しました。寅吉は、徴兵制後の戦死者としては流山市内で最初の人でした。また、明治13年頃の築堤記念碑の碑文には、毎年洪水に悩まされていたことや築堤の請願、碑を建てるに至った経緯などが書かれています。

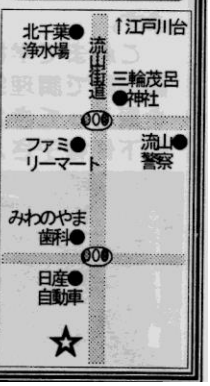
須郷寅吉の碑

わがまち・ふるさと再発見！

＝身近な史跡めぐり＝

㊽ 三輪野山貝塚（三輪野山2丁目）

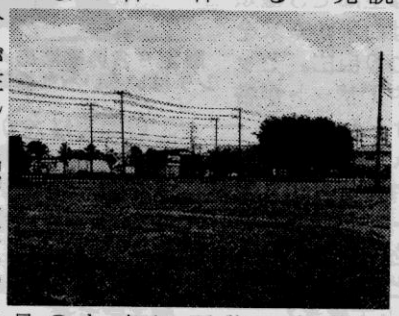
案内役 田村哲三



三輪茂侶神社を左に見て交差点から加方向に進むと右手に三輪野山4号公園があります。

この公園は三輪野山貝塚の跡地で、発掘調査後に公園として整備されました。発掘された遺跡は約4000年前～約2600年前のもので、貝塚は第5貝塚まで検出されましたが、現在は貝層や貝殻を見ることはできません。公園内には解説版が設置されており、発掘状況の解説や出土品、住居跡などの写真を見ることができます。

同貝塚は道路建設に伴い発掘調査されましたが、道路の左右や三輪茂侶神社近くにも合わせて7つの遺跡が発掘されています。これらの遺跡は、三輪野山の台地に古くから人々が住んでいたことを証明しています。縄文時代、古東京湾が北上して台地を侵食、舌状の台地を形成しました。侵食された台地と台地の間は、波静かな入り江となり魚介類が獲れ、縄文人が食したことが、出土した魚介類や動物の骨からもわかりました。また、傾斜地には湧水があり、縄文人が集落を作りやすい環境でした。住居跡は、4軒、7軒、10軒などとまとまって発見され、60軒と大集落跡もありました。年代が進むにつれ、大規模な集落が出来たのでしょう。平安時代の住居跡もあったため、時代は変わっても住み良い環境の地であったと思われます。墓坑も210基あり、人骨も8体出土しています。縄文後期になると貝類はヤマトシジミに限定されます。これは海水の後退により真水が増えたためと考えられます。



発掘調査により貝塚以外のことも分かりました。

出土品には貝や動物の骨で作った鏃や刀子、装飾品、いろいろな形の土器や遮光器土偶もありました。中でも目を引くのが、ヒスイの加工品や加工途中の未成品が多数あったことです。ヒスイの原石、加工道具もありました。つまり、この遺跡にはヒスイの玉造り村があったということです。ヒスイの産地は富山県の糸魚川流域ですから、糸魚川との交易があったと考えられます。そのルートは山を越える陸路なのか。遮光器土偶が東北地方の影響を受けていたとすれば、山内丸山遺跡（青森県、ヒスイ出土）経由の海路なのか。謎とロマンを呼ぶヒスイと遮光器土偶といえます。

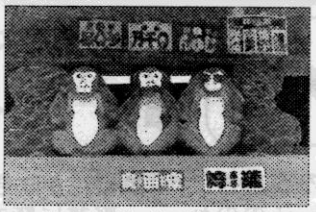
（参考資料：流山市立博物館）

わがまち・ふるさと再発見！

＝身近な史跡めぐり＝

89 天神社（大畔）

案内役 田村哲三



大畔255番地、大畔自治会館の隣に天神社があります。祭神は菅原道真、創建は不祥。社殿の鴨居には、神社には珍しい三猿の彫刻が飾られています。祭神と三猿とは無縁と思われますが、三猿は庚申信仰のシンボルですから、庚申信仰の盛んな時代に建造されたものと思われ、同神社で庚申信仰が行われていたとも考えられます。

天神社の多くは、京都北野天満宮の由来とされる怨霊除け、火雷除け（火雷天神とも呼ばれた）として創建されましたが、降雨神（農業神）としても信仰されました。庚申信仰も江戸中期以降は現世利益や農業神として信仰されたので、天神信仰と一体になったと考えられます。

参道左に「梅の図絵馬」の解説版があり、「文化15年（1818）、福富宗直が願主となって、近隣村の門弟40名とともに学問の成就を祈念して奉納した。絵馬は縦81㎝横52㎝と大きく、市内で最も古い。江戸時代の教育を知る上で貴重な資料として、市の文化財に指定されている」と記されています（解説版要約・絵馬は市博物館に展示）。絵馬には「諸願成就皆令満足」と記されており、学問以外の願いもあったのでしょう。前出の庚申塔と茂侶神社に建つ千庚申塔には、諸願成就所とあるので、絵馬と関係があるのかもしれません。北小屋香取神社にある文化9年建立の千庚申塔に、6名の俳句が刻まれていることでも、大畔や近隣村の文化の高さを垣間見ることができます。

隣接地には、かつて観音寺という真言宗の寺院が建っていました。当時の名残として、新四国江戸川八十八カ所霊場の第八番と第七十八番札所の大師堂や、昭和11年に建てられた弘法大師千百年記念碑があります。また、墓地には寛政10年（1798）の光明真言塔があり、塔の上部の円の中には、円形に梵字で光明真言23文字が刻まれています。光明真言を唱えると一切の禍から逃れられるとされた信仰で、塔は講中により建てられました。他の石造物では庚申塔や十九夜塔、道祖神、天保十一庚子年五月（1840）の銘がある大々講記念碑があります。大々講は伊勢講のことで、講中の代表者が伊勢参りをして講中の御利益を頂いてくるものです。

わがまち・ふるさと再発見！

＝身近な史跡めぐり＝

90 神明神社（下花輪）

案内役 田村哲三

流山街道を流山に向かって桐ケ谷のバス停を過ぎた右側、「ほっとプラザ下花輪」に通じる細い坂道の中ほど右手に神明神社があります。祭神は天照大神の別称の大日孁貴神（おおひるめのむちのかみ）です。創建は不祥ですが、当地の旧家、渋谷家の家伝では、渋谷氏の祖の金剛麿呂が伊勢神宮から祭神を分霊し、当地に祀ったと伝えられています。境内右手に皇大神宮の社、左に天神の社があります。

石造物では薬師如来塔や光明真言塔もあり、神社に仏教の石造物は不似合いですが、神仏混合というよりも、今は廃寺となった下花輪の寺院から、あるいは路傍に祀られていたものが移されたのでしょう。ほかに駒形宮、妙見宮、庚申塔、板碑があります。板碑は3基で、いずれも破損されています。花輪城址公園の項でも述べましたが、花輪城跡の空堀から多数の板碑が出土していることでも、花輪地区には古くから板碑文化があったことが分かります。

古いものでは延宝7年（1679）9月19日造立の十九夜塔があり、次のように刻まれています。

奉納十九夜念仏講二世成弁所
奉納百堂巡礼二世安楽所
延宝七己申天九月十九日　下総国小金領之内桐ケ谷花輪村　同行三十三人　同行廿三人　飛天　日月　三猿

刻まれた文字からいろいろなことが分かります。塔は十九夜講、念仏講の32人、百堂巡礼の23人によって二世の安楽（現世の利益と死後の極楽往生）の祈願所として建てられました。3つの信仰衆とも祈願は二世の安楽を主としていたので、祈願日は違っていても、祈願所は共同で建てたのだと考えられます。三猿があることから庚申信仰にも関係していたと思われます。また、1人が複数の講に参加している場合もあったようです。なお天は年の意。現在は上花輪ですが、当時は花輪村でした。

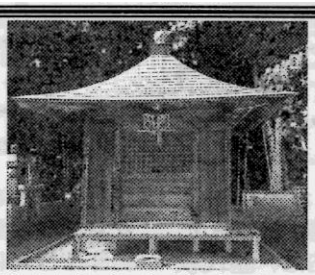
元禄11年（1698）造立の庚申塔には「庚申幸神諸願成就攸」と記され、桐ケ谷地区以外では見られない、幸神の信仰があったことが分かります。幸神は賽神、道祖神、猿田彦神などと同じとの説もあります。

わがまち・ふるさと再発見！

＝身近な史跡めぐり＝

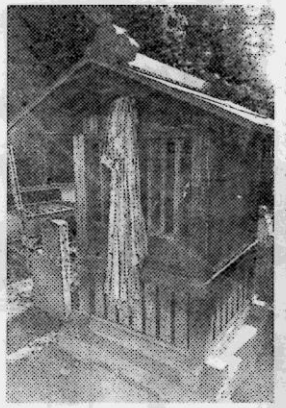
㊶ 浄栄寺（桐ケ谷）

案内役 田村哲三

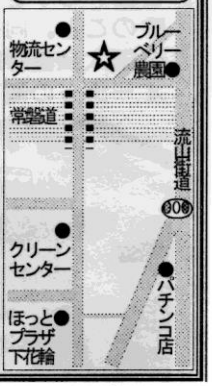


流山街道を流山に向かい、高速道路に架かる橋の手前を右に曲がると物流センターに降りる坂道があります。地元では浄栄寺の坂と呼ばれ、その中ほどに真言宗浄栄寺が鎮座しています。創建不祥、本尊は十一面観音。かつては寺院として繁栄していたと思われますが、今では山門も本堂もなく、正面の観音堂が、わずかに寺院らしさを保っています。観音堂には本尊の十一面観音像が、境内入口右の大師堂には2基の大師石像が安置され、新四国江戸川大師巡拝の第三十番と八十八番札所になっています。入口左のお堂には手児奈大明神が祀られています。手児奈についてはほかの寺社で解説していますが、改めて記します。

「舒明天皇の時代（629～641）、葛飾の国造の美しい姫手児奈は、他国の国造の息子と結婚し幸せに暮らしていましたが、あるとき、国造どうしの争いが起き、故郷の真間に帰り子どもを産みました。真間に帰った姫を見た男たちは、あまりの美しさに驚き4人が同時に求婚しました。手児奈は『心は4つに分けることができても身は分けられない』といい、真間の入江に身を投げました。真間の浦の人たちは手児奈を気の毒に思い、亡骸を手厚く葬り祠を建てた」というものです。



ひっそりと祀られている手児奈大明神



737年、奈良の高僧行基は手児奈を哀れに思い、墓の近くに寺を建てました。今の弘法寺です。また、万葉歌人山部赤人は真間に立ち寄り、次の歌を詠んでいます。

われも見つ人にも告げむ葛飾の真間の手児名が奥津城処

奥津城はお墓のことです。手児奈は都の高僧や万葉歌人にも知れ渡っていたのです。その後、手児奈は安産の神として女人に信仰されました。手児奈霊神堂が広く信仰されるようになったのは1830年頃と言われ、市内にある4つの手児奈塔も1860年前後に建てられました。いずれも女人講によるものです。

観音堂の裏手には、念仏講により建立された地蔵の石像や浄栄寺の暦代住職の墓石が並んでいます。

わがまち・ふるさと再発見！

＝身近な史跡めぐり＝

㊷ 八坂神社（上新宿）

案内役 田村哲三

金刀比羅神社の西側の道路を北に行くと、江戸川台方面と北小屋方面に分かれるY字路があり、道に挟まれたところに八坂神社があります。創建は不祥ですが江戸時代から上新宿村の鎮守として祀られています。境内にある昭和4年建立の合祀記念碑には八坂神社、諏訪神社、稲荷社とあり、三社が祀られています。

祭神は素戔嗚命（すさのおのみこと）と鳥居の扁額には素戔嗚大神（すさのおおかみ）。平家物語の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」からもわかるように、八坂神社の本宮は祇園祭で有名な京都の八坂神社です。江戸時代までは祇園社と呼ばれ、主祭神は牛頭天王（ごずてんのう）でした。明治時代に八坂神社となり、祭神も素戔嗚命に変わりました。

社前の道は江戸時代の船戸道で、流山と船戸（柏市）を結んでいました。また、森を隔てた東側、西初石との境界には美原から続く野馬土手がありましたが、近年の開発で姿を消しつつあります。北側の江戸川台との境の低地は縄文時代の海の入江で、上新宿には貝塚もあり、縄文人にとっては住みよい所であったようです。周辺の江戸川台や富士見台からは遺跡が発掘され、縄文時代や江戸時代に想いを馳せながら周辺を散策するのもロマンかもしれません。

境内には神社には不似合いな大師堂、三峯社、天神社、元禄15年の庚申塔などがあります。大師堂はよそから移されたものと思われます。

待道大権現の石塔は「まちどう」と呼び、東葛地方に伝わる道の神で、次のような逸話があります。

「むかし仲の良い若夫婦がおりました。あるとき夫が遠出をし、帰りを待ち合わせていました。ところが夫は待ち合わせの場所を間違えてしまいました。身重だった妻はいつまで待っても来ない夫を心配するあまり、急に産気づいてしまいます。間違いに気づいた夫は慌てて待ち合わせの辻に駆けつけると、妻は既に赤子を産み落としていました。しかし、母子共に無事だったことから、道の神様が助けてくれた、と感謝して、待ち合わせの道の神だから待道神としてお祀りした」と言うものです。以来、安産や子宝授かりの神様として女性から信仰されました。